

防除所情報第3号

令和4年6月29日
山梨県病害虫防除所

【施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培終了後の対策）】

[発生の状況]

- (1) 昨年の抑制トマト栽培では、トマト黄化葉巻病の発生が平年より多く見られた（図1）。本病害はコナジラミ類の一種であるタバココナジラミによって、病原ウイルス（以下、TYLCV という。）が媒介される。
- (2) 今年の半促成栽培での発生はほとんどなく、コナジラミ類の誘殺数も平年より少ないが、例年県内の主要なトマト産地では、抑制栽培において生育初期からコナジラミ類が多発しており（図2）、トマト黄化葉巻病の発生も増加傾向にあるため、引き続き注意が必要である。



図1 黄化葉巻病多発ほ場の様子
葉は黄化し葉巻症状となる

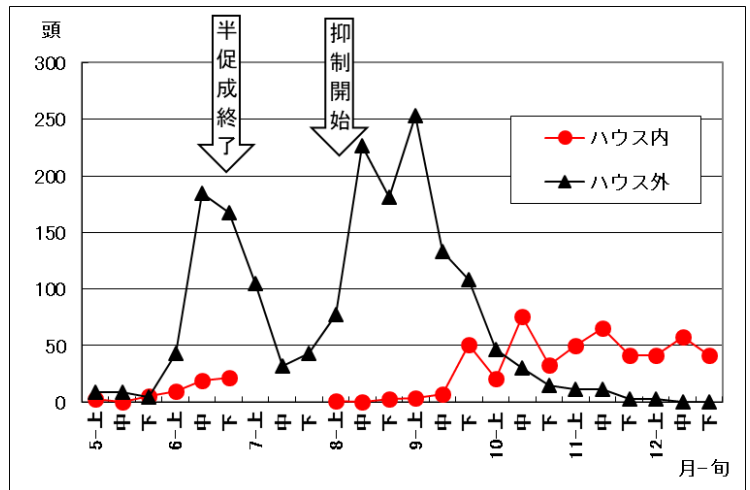


図2 施設内外のコナジラミ類発消長
(黄色粘着板による調査 2015~21年の平均値)

[防除対策]

TYLCV を保毒したタバココナジラミは、現在栽培中の施設から飛散した後、野外の雑草等へ移動・増殖する。その後、次作の育苗期や定植時に再び野外から施設へ侵入し、新たな TYLCV の感染を引き起こす。

TYLCV の感染を防ぐには、媒介虫であるタバココナジラミの栽培施設外への飛散と再侵入を防ぎ、伝染環を断ち切ることが重要であるため、以下の対策を徹底する。

半促成栽培終了時の対策

- 収穫終了まで農薬散布等コナジラミ類の防除対策を行う。
- 産地で終了時期を統一することでトマトを作付けしない期間を作り、次作へのコナジラミ類の持ち越しを防ぐ。
- ウイルス保毒虫の施設外への飛散を防ぐために、栽培終了時に株を地際で切断し、十分に枯らしてから植物体を施設外に持ち出す。

- 夏季の高温を利用し、施設を10日間以上密閉して蒸し込むことで施設内に残っているコナジラミ類を死滅させる。また、土壌還元消毒により土壌内へのトマトの残渣をすき込むことでも、コナジラミ類を死滅させることができる。(※)
- 施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖場所となるため、除草を徹底する。

(※) 詳細は令和2年度成果情報「トマト茎葉残さすき込み処理を組み合わせた土壌還元消毒による病害虫防除」および「トマト茎葉残さと米ぬかを組み合わせた土壌還元消毒の窒素供給効果」を参照する。<https://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/r2seikajoho.html>

抑制裁培開始までの対策

- 施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）は0.4mm目以下の防虫ネットを展張し、コナジラミ類の侵入を防ぐ。すでに設置している場合は、隙間や破れ等がないか注意して確認し、破れ等がある場合は直ちに補修する。
- 栽培施設の出入口は二重構造にし、開放状態にならないようにする。

抑制裁培開始時の対策

- 病害虫の発生がない苗を使用する。
- 育苗期や苗導入時から防除を徹底し、ポットへの薬剤処理を行う。または、定植時に粒剤を使用する。(薬剤については表1参照)
- ほ場周辺や施設内には黄色粘着テープや銀色反射資材（UVシルバー等）を設置し、施設内へのコナジラミ類の侵入を防止するとともに、施設内に入ってしまったコナジラミ類を誘殺する。
- コナジラミ類の発生状況を確認するための黄色粘着テープは、定植した株の成長点付近に高さを調整する。

表1 トマト育苗期から定植時におけるコナジラミ類に登録のある主な薬剤

薬剤名	RACコード	使用量・希釈水量	使用方法	使用時期	使用回数
ベリマークSC	28	薬量 25ml/400株 (希釈水量10~20L/400株)	灌注	育苗期後半~ 定植当日	1回※1
プリロッソ粒剤オメガ	28	2g/株	株元散布	育苗期後半~ 定植当日	1回※1
ベストガード粒剤	4A	1~2g/株	植穴処理 土壌混和	定植時	1回
スタークル粒剤 アルバリン粒剤	4A	1~2g/株	植穴土壌混和	定植時	1回

※1 ベリマークSC、プリロッソ粒剤オメガの定植時までの使用はどちらか1回まで

※2 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の定植時の使用はどちらか1回まで

- 「トマト黄化葉巻病（抑制裁培版）の防除対策（令和3年11月）」も併せて参照する。

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/20200106oukahamakiboujosisinn.pdf>